

序

赤木完爾先生は、本年度三月末日をもつて慶應義塾大学法学部を定年により退職される。先生は、一九八〇年三月、慶應義塾大学大学院法学研究科政治学専攻修士課程を修了され、翌月より、防衛庁防衛研修所「戦史部」（現在は「戦史研究センター」に改組）の助手に着任される。その後、一九九〇年四月より慶應義塾大学法学部専任講師に採用され、九二年に助教授、九七年に教授へと昇任され、翌九八年以降、先生には法学研究科委員としても大学院教育に多大なご尽力を頂いている。実に二八年の長きにわたって、赤木先生は法学部に貢献された。

赤木先生は本学部政治学科のご出身で、本塾名誉教授であられた故神谷不二先生の研究会に学ばれた。日本における国際政治研究の嚆矢ともいわれる神谷先生の深い薫陶を受け、赤木先生は、国際政治史、戦争史、安全保障研究において優れた業績をあげてこられた。とりわけ、一九三〇年代から五〇年代までの国際政治史や同時期のアジアで起きた戦争をめぐる政治と戦略に造詣が深く、またこれと関連するアメリカの政軍関係についてのご研究においても高い評価を受けてこられた。一九八九年、赤木先生は「ヴェトナム戦争の起源——アイゼンハワー政権と第一次インドシナ戦争」により法学博士（慶應義塾大学）を授与され、同論文はその二年後に慶應通信株式会社より刊行されるが、同書は防衛学会（現「国際安全保障学会」）の最優秀出版奨励賞たる加藤陽三賞を受けるに至る。また、一九九七年には、『第二次世界大戦の政治と戦略』（慶應義塾大学出版会）を上梓され、これにより義塾賞を受賞されている。

前述したように、赤木先生は慶應義塾に奉職される以前に、一〇年間、防衛庁防衛研修所（一九八五年より

「防衛研究所」に改称)に勤務されており、主として戦争史研究の学術化に尽力された。数多くの関連研究書や公刊戦史の収集・収蔵を先導すると同時に、国際関係論の幅広い視点を踏まえた新しい手法による研究成果を精力的に学界に報告することを通して、それまでにはなかった戦争史研究の新たな局面を拓かれた。そうした赤木先生の防衛研究所への学問的協力は、同研究所が主催する戦争史研究国際フォーラムや研究会等への積極的な参加によって現在も続いており、その活動の成果は多くの論文となって発表されている。こうした赤木先生の学識は、航空自衛隊幹部学校や防衛省統合幕僚学校等における、高級幹部自衛官に向けた先生の教育実践にも繋がっている。

なお、赤木先生は防衛研究所勤務の間、一九八七年から翌年にかけて、米国ジョーンズ・ホプキンス大学高等国際問題研究大学院に訪問研究員として在外研究に出かけられている。また慶應義塾にいらしてからは、一九九四年から二年間、イェール大学に、また二〇〇五年から翌年にかけては、ハーヴァード大学燕京研究所に、それぞれ訪問研究員としてご留学されている。いくつもの受賞歴を持つ先生の数多くのご業績は、先生のこうしたご研鑽の成果として世に著されたのである。

このようなご活躍を背景に、現在、赤木先生は、国際安全保障学会、軍事史学会、戦略研究学会、日本国際政治学会等で副会長職、理事職にある。また国立公文書館アジア歴史資料センター諮問委員会委員長やその他数多くの機関の要職をお務めになられており、後述の塾内のお仕事の傍ら、まことにご多忙と察するものの、しかし潑刺として重責をこなされる先生のお姿がそこにはある。

赤木先生の指導される研究会は、大量の課題——毎週四千字以上の書評——を出すゼミとして有名であるといわれる。慶應でのゼミ発足の当初は、「本は筋肉で読むものだ」という趣旨のことをよく口にされたという。私見によれば、頭の細かい働きも大事だが、大筋を逃さず、思考をどこまでも持続させられるような「頭の体力」

が大事だと先生は言わんとしたのではないだろうか。いつか先生からのご教示を得られれば幸いである。

赤木先生は、二〇〇九年より三田インフォメーションテクノロジーセンター（三田ITC）の所長であられ、一年から「三田」がとれて、全塾規模でITCの所長になられた。先生は、最新の情報テクノロジーに明るく、学部や研究科の会議でも、私も含めて機械に疎い教員に対してこの上なくクリヤーな説明をして頂いた。さらに二〇一五年から現在に至るまで、慶應義塾図書館長・メディアアセンタール所長・三田メディアアセンタール所長の職にあつて、全塾の学術情報の管理者としての要務に携わっておられる。まことに知力に体力に溢れたバイタリティーの持ち主といえよう。

ここに、赤木完爾先生の長年にわたる法学部へのご貢献に厚く感謝申し上げますとともに、今後のご健勝を祈念し、法学部として本号を謹んで進呈させていただきたい。

二〇一九年一月

法学部長 岩谷十郎